
痛薔薇姫！！

桜井広樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

痛薔薇姫！！

【Nコード】

N9053G

【作者名】

桜井広樹

【あらすじ】

テストで奇跡の満点を取った主人公はある人に目の敵にされてしまった！！その人はお嬢様で、成績優秀。そして、誰もが見ても綺麗だと言える女。だが、彼女は欠点がある。言い方に棘あり、毒ありという口の悪さだ。ついたあだ名は痛薔薇姫だ！彼女と主人公の運命はいかに！？

プロローグ(前書き)

感想をお願いしますm() () m

プロローグ

突然だが、この世にとっても美しい物がある

例えば花、空、太陽、草原、海、山などだ

人によっては、鉄道や工場や民家、歴史的建造物なども美しいと思う人もいるだろう

それは、人それぞれだからそう思うならそれでいい

それは思考の問題なんだから

だが、それを見る事は決して、簡単ではない

だから、苦勞したりして、その場所に行こうとする

そして、それを見た時人は感動する

だが、それは本当なのか？

例えば、それがとてつもない荊つばきの中にあり、その中に入って永遠と歩く

体は傷つき、血だらけ、疲労も溜まり、もう一步も歩けない状態

そして、やっと辿り着いて見たら、たった一輪の薔薇の花だけ

これで、君は感動したり、美しいと思ったりするかあ？

百歩譲って、その花はかなり綺麗だとしよう

だが、それは怪我をし、長い時間歩くという、ハイリスク

頑張ったのにたったの一輪の花だけ

悲しくないかあ？

そして、見る価値があるのかあ？

え？

だから、何が言いたいかって？

つまり、俺が言いたいのはこの世に美しい物なんか、見る必要なん

か無い

勿論触る事も・・・

始まりは掲示板 男編 (前書き)

感想をお願いします。

始まりは掲示板(男編)

俺は……馬鹿だ……。

突然だが、申し訳ない。

決して、俺は頭がおかしい訳ではない。

普通の一般学生だ。

俺の名前は織田圭介^{おだ けいすけ}16歳の高校一年だ。

俺は今まで、テストを真面目にやった事がない。

寝てたり、鉛筆転がしたり、他の人の欠伸の回数や、先生のハゲ頭にシャーシンを飛ばして頭のど真ん中に当てたりして、空欄を適当に埋めて点をとっていた人間だ。

だが、流石に留年になるという訳で二学期のテストを真面目に勉強して、テストを受けた。

そして、学校の掲示板で総合順位が張り出されたその日の事を回想しよう……。

「織田ー！」

俺は呼ばれた方向を向くと、決して友達とは言えない幸田和也（こっただ かすや）がいた。

「何だ。」

「何か、酷いこと考えてなかった？」

「気のせいだ。」

どうせ、消えるキャラなんだから酷くはないだろ。

「……なら良いけど。それより行こうぜ……」

「ん？どこ？」

はて、今日は何があったか？

「今日テスト結果発表だよ！今回は自信あんだよなー。今回はお前に勝てるぞ！」

おー。もうそんな時期なのか。

「忘れてた。つか、お前毎回それ言って赤点じゃねーか。」

「ははははー。今回の俺は一味、いや二味も違うのだ！！」

なんだそれ？

「人はそんな簡単に変わらんが、そこまで言うなら賭けないか？」

俺は少し笑いながら言った。

「いいぞー！！」

幸田は快く乗ってくれた。

さて、何を賭けようか・・・。

と俺が考えてた時、

「よし！決まった！！俺が勝ったら、授業始まったら、校庭のど真ん中で一発芸を授業終わるまでやり続けるな！」

と幸田が言った。

・・・ほほう。

この俺にそんな事が言えるとは。
大層な自信じゃないか。

「ならば、貴様は校長と教頭に、

『この授業料高いんだよ！安くしろやこのハゲ！！つつか、集会の時話長いんだよ！！！！そんな大した話してねーのに、何熱く語ってんだよ！！！！調子こくんじゃねよ！！ぺっ！！！！』
つと言つてこい。」

「なっ！これやったら停学いくだろ！？」

「貴様の賭と対等にしたんだが？逃げるのか？俺は勝つ気あるからいいぞ。」

「はっ。上等だ。コールしよう！！後で後悔すんなよ！！」

お前がな。

~~~~~

「……嘘だろ？」

はっはっはー。

まさかな〜。

本当にとれるとはな〜。

「織田が……満点!！」

そう、俺は900点満点中900点だったのだ。

そして、幸田はというと

「195点……」

赤てんは29点以下だ。

つまり、9教科で300点以下は確実に赤点。  
というか、勝負以前に本当に勉強したのか？

まー勝負だからな〜。

俺は心の中でそう思いながら、幸田の方向いてにっこり笑いながら

「賭け……。ちゃんと、やれよ。」

と言った。

「ちくしょおおっうっうっ！！覚えていろおおおおお！！！」

と叫びながら、幸田は脱兎の如くどっかに行ってしまった。

あと、何を覚えとかなきゃいけないんだよ。

俺はもう一度掲示板を見た。

「いやー。まさかとれるとはな。」

そついいながら、もう一度自分の順位を見ると、堂々と一位の所に俺の名前がちゃんと載っていた。

「まあー当然だな。満点とって一位になれなきゃおかしいもんな。」

と言いながら、自分の天才ぶりに酔っていた。

だが、この後この順位に間違いがあっただけと願ってる自分がい

た。こいつのせいで、自分に悲劇が起こるなんて全く思ってた。なかつた。

そう、勉強は日々努力して、そこそこの点数をとるのが一番いいのだ。

一番……。

あ、そうそう。幸田のその後は俺は知らない。  
ただ、強いて言つなら最近見なくなったと言っておこう。

t o b e c o u n t i n u e

始まりは掲示板〈男編〉(後書き)

更新は週に一回か二回のペースで更新します。

## 始まりは掲示板〜女編〜

織田が掲示板見てる一方で、ある女性3人組が着いた。  
その時のお話。

「うわー混んでるわねー」。

「・・・みんな見てるから・・・」

「ふん！凡人どもが何か叫んだって何も起きないのよ！！」

そう、今さら叫んだって何も変わらない。

そうなのは、自分達がいけないんだから。

まあ天才と凡人の違いもあるけどね。

「もう。こうなる事分かってるのになんで見るのよ！！どーせ私達



が1番なんだから！！見なくてもいいのに！！もっつ！！！！」

私は、そう言つて2人を睨んだ。

「分からないよー。もしかしたら、天才君が現れたりするかもよー。

」

と、1人はくすりと笑いながら言う。

「・・・私は・・・総合点数見たかったから・・・。」

もう一人は無表情に言った。

「確かに、総合点数は見たいわ。でも、天才は現れない。なぜなら私が1番なんだから。」

私がそう言った瞬間、1人で笑いながらすれ違つ男がいた。

え！

今の人何？

一人で笑うなんて……キモっ!!

「まーそうだけどねーってあれ?どうしたの?」

「今、一人で笑いながら歩いている男がいたわ。」

「え!本当!?そんな人いたんだ。テストで頭の中が壊れちゃったのかな?」

「……珍しい……学校だから……そういう人も……いるのかも。」

珍しいからといって、テストで頭が壊れてたら大変よ……。

「さて、そんな変な人の事は置いて見よう!」

「だから、見ても意味が……。」

「……………? ……どじしたの?」

無い

「……………無い。」

「何が無いの?」

あたしの……………

「あたしの名前が……………な——————い……………!」

「嘘!? あるでしょ!」

「無い!! あたしの名前が……………。1位の所がない!!」

「え!? ……本当だ。」

1位の所に、織田 圭介という名前が載っていて、その下にあたし  
の名前が載っていた。

「誰！？こいつは！！」

あたしは、2人の方を向いた。

「知らないよ！でも、本当に天才君いたんだ……。」

「しかも……満点……だね。」

あたしが負けるなんて……。

ありえない。

ありえない。

ありえない。

ありえない！！

「ふふふ。いいわ。これはある意味宣戦布告ね。」

「え？どうしたの？ちょっと怖いよ。」

「頭……壊れちゃた……みたい……だね。」

「いいわ。受けて立とうじゃない！！」

私は携帯電話を取り出して、ある所に電話した。

「あたしよ。今すぐ、織田圭介という人間を私達のクラスに入れなさい。」

「あらあら。本気だね。」

「・・・どうなるかな？」

「どうも、ならないわよ。」

私はそう言い、もう一度掲示板の方を向き、織田圭介の名前を見た。

「歓迎してあげるわ。・・・織田・・・圭介!!」

私はそう言い笑った。



始まりは掲示板〜女編〜（後書き）

感想お願いします。

始業式！今日から俺は・・・（前書き）

遅れてすみません m ( ) m



始業式！今日から俺は・・・

季節は春

春・・・俺はいよいよ二年生になる！  
と言いたいが、そんな喜べない。

「はぐ。だるい。」

テスト結果から約1ヶ月ぐらいたつ。  
4月になれば新学期になるが、新学期で喜ぶやつはいないだろう。  
二年生に、なつて変わる事は、勉強が難しくなったり、教科書買わなければいけないなどの嫌な事が起こる。  
そして、もう一つ嫌な事は、

「クラス見ないとな。」

そう、クラス替えだ。  
今までいた友達がいくなつたりいたり、違うクラスの友達と一緒に  
なつたり等かなり騒がしくなる最初の行事であろう。

「掲示板は・・・やっぱり混んでるな。」

大抵混む原因は自分の名前が見えたのに、友達がいるのか確認したりして、ずっと見てるからだ。  
正直後で分かるんだから、ささっとクラスに行けよ、と突っ込まずにはられない。

「あ！織田じゃないか！」

「ん？」

俺は呼ばれた方を向くと、見知らぬ男がいた。

「誰だ？」

「おい！忘れんな！幸田だ！！」

・・・。

あー思い出した。  
最近消えたと思ったやつだ。

「また、酷い事考えてなかったか？」

相変わらず鋭いな。

こういうことに関しては。

「それより何だ？俺を呼んで？」

「スルーかよ……。あ、そうそう。クラス見てないよな？一緒に見に行こー！」

こいつと見に行くのかよ……。まー、一人で見るよりましか。

不本意ながら。

「あーいいぞ。」

「……やっぱり酷いこと考えてないか？」

本当に鋭いな。

~~~~~

「。」。さっしゅ。

幸田はそう言いながらため息をついていた。

「仕方が無いとはいえ、さっさと見てくれないと見えなんだよな。」

俺はそう言って、あまりの人の多さにいらつきながら掲示板を見ていた。

「まー、そう言うなって。あっ！俺進級してるう！やったー！！2

- B かあゝ。」

喜ぶのそこかよ。

普通は、

「誰々と一緒だー！」

とかで喜ぶだろ。

というか、あれで進級できるというのが驚きだ。

「先生が進級できるかって聞いてるのに、笑いながら誤魔化されてたから……。本当に進級できたよ。」

と言いながら泣きながら喜んでた。

俺は、無視しながら自分の名前を探していた。だが、見つからない。

「あれ？無いぞ。」

「どうした？」

幸田は復活したらしく、俺に話しかけてきたが無視している。
話したら負けだ。
何に負けるのかは不明だが。

「・・・ひどい。友が進級できたのに！喜ばないのかあ！！」

知るか！！

何故貴様の進級を喜ばなきゃなんねーだ！！
テストが悪いのは貴様のせいだろうが！！！！

「君が織田君だね？」

突然後ろから呼ばれたので、振り返ってみると髪は少し短めで色は白だが光で銀色のように輝き、背は180ぐらい軽くあるかなりの長身。

そして、顔は誰が見ても格好いいと言っぐぐらいの美形。
そんな男がにっこり笑ってながら立っていた。

「誰だお前。」

「知らないのか！お前！！桐島響を！！S組の奴だ！！」

と幸田が言った。

そういえば、S組とかまだ説明してないことがあったな。
んじゃここら辺で説明しとかないとな。

ここ、おっかがくえん桜花学園は超がつくほどマンモス校だ。

普通のクラスはA〜Iで、特進のTがある。

ここまでは一般庶民が入れるクラスなんだが、スペシャルクラスいわゆるS組というクラスがこの学園にはあるのだ。

ここは、成績優秀で金持ち。そして、10人しか入れないクラスなのだ。

俗に成金クラスとも言つ。まーそこに入れたら、この学園では有名になる。おまけにみんな美形らしい。

まー俺には関係が無いものだから興味は無かった。

だが、なんでそんな奴が俺の名前を？

「そのようだ、まだ見つけて無いようですね。自分のクラスを。」

桐島はやれやれといいながらため息をついた。

「何でお前にため息つかねなきゃいけないんだ。お前には関係無い

だろ。」

俺は人の多さと人前で溜息つくという行動にキレていた。
あと、さっきから慣れなれしい。
しかし、桐島はそんな事を気しないで、

「いえ。かなり重要ですよ。」

ときっぱりと言い、桐島は微笑みながら爆弾発言をした。

「なんせ、僕と同じクラスなんですから。」

はい？

コレと同じクラス??

つうことはあれ？

何かめまいと頭痛が……。

「そう。今日から僕と同じS組です。よろしくお願ひしますね。」

とまた、につこりと笑う桐島。だが、俺はこれは悪い夢だと思っていた。

「これは夢だ……。」

と俺は直ぐにS組特別の掲示板に走った。

何で俺が!!

俺は一般庶民ですよ!!

そう思いながら俺は無我夢中で走り、S組の掲示板を見た。

「嘘だ……。これは夢だ……。」

S組の掲示板にちゃんと俺の名前が載っていた。

今日から僕はS組です。

マジっすか・・・。
泣きてー！。

始業式！今日から俺は・・・（後書き）

感想お願いしますm（）m

3人の謎の女

「夢じゃないのかよ……」

俺はトボトボと歩いていった。

俺はあの掲示板は間違いだと思い急いで事務室に行った。だが、あれは間違いでは無く現実であった。

「何で俺が……S組なんだよ……」

S組。それはお金持ちで成績優秀。

そして、僅か10人しか入れないクラスである。そして、皆さんかなりの美形らしいの集まりなのに……。

「俺、金持ちじゃないぞ」

そう！ここ重要なんだよ！！

S組に入ったら学費は数倍程のお金を払わなければならないのだ。

俺は一般庶民なんですよ。

何で入りたくないのに高い金払わなければならないんだ！！

今俺はS組のクラスに向かっている。

S組のクラスは普通のクラスから離れており、少し歩かなければならない。

「だいたい、あの桐島とか言っちゃつはどこに消えたんだ？あー、イラつく！」

そんな感じでブツブツ文句を言っていた。

「あーくそ！学校辞めてえよあー」

と言った時だ。

「どうしたの？」

といきなり横から話しかけられた。

俺は横を見ると、少し茶色で短めの髪型で、とても可愛い女の人がいた。

「えっ？いや〜。その・・・」

俺はいきなり女の人に話しかけられ戸惑ってしまった。

「あっ！ごめんね。何だか困ってそうだったからちょっと気になっ

て・・・」

はい。

めっちゃ困ってます。

この学校のせいで。

「いえいえ。実は、いきなりS組に変えられちゃて、何で俺が・・・
って感じで困ってたんですよ」

俺はめっちゃ敬語で喋った。

そしたら、女の方は顔がぱっと明るくなった。

「君が、織田君？」

「あ。はい。そうです。あのー何で知ってるんですか？」

と俺が言うと女の方は微笑んだ。

「そっかあ。君が織田君なんだ。私もS組なの。よろしくね！」

と女の方は俺の質問を軽くスルー。
ちよっとヒドい。

「あつ。はい。よろしくお願いします」

俺は軽く頭を下げた。

だが、女の人はケータイを取り出した。

「あつ！ごめんね。友達待たしてるからもう行くね。じゃあまた後でね！」

と言いさっさと行ってしまった。

「・・・何なんだ。あの人は」

人の話を聞かなくて、ちょっとショックだった俺だが、こんな事では挫けない。

「・・・早くクラスに行く」

俺はクラスへと向かった。

~~~~~

「やっと着いた。流石に疲れるな」

あれから15分ぐらい歩きやっとS組の校舎の入り口の前に着いた。

一般の校舎と違い、S組のクラスは丘の上に校舎がある。

結構歩くんだよね。

つか、こんな所に校舎を置くんじゃないかねえ!!

俺は扉を開き中に入った。

中は綺麗だった。

無駄に。

金をめっちゃ使ってると思えない。

部屋に壺の置物があったり、柱は遺跡とかによくある立派な石のやつだし、床にレッドカーペットがしかれているし、天井にシャンデリアがあったり。

ツッコミどころ満載だ。

「・・・次元が違いすぎる。俺こんな所にいていいのかな」

流石の俺でも弱気になっていた。

人間は自分より上の次元だと、

「ここに自分がいていいのか？」

という事を思う浮かべてしまい直ぐ弱気になってしまふ。  
今がそれだ。

「えーい！悩んでもダメだ！」

と言い頭を切り替えて、階段の方に向かう。  
やっぱり階段もレッドカーペット。

「・・・もういい。見飽きた」

レッドカーペットに飽きる人間っているんだなっと思いつながら階段  
を上ろうと思った時、いきなり階段から人が落ちてきた。  
・・・人!?

「はいい!?!ちよっやばあ！」

俺は、その人とぶつかり下敷きに。

「痛つて〜」

俺は無事階段から落ちてきた人を救出に成功した。  
気絶しなかったが、背中はかなり痛い。



「……痛い。……あ。……ごめんなさい」

とその人は俺から離れた。

その人は髪は長く、色は黒。まるで大和撫子みたいな女の人だった。

ふと、さっきの状況を思い出すと、俺の上に女の人が上に……。

そう思った瞬間、俺は顔が赤くなった。

やっぱ！

直で顔が見れねー。

「……ありがとう」

と彼女はちよつと顔を赤くしながら言ったが、俺は顔を合わせていなかった。

「何やってるの？」

と不意に人の声が振り向くと、髪は腰まであり目が少し鋭いが、綺麗だった。

多分、今まで会った人の中で一番綺麗かもしれない。

だが、少し嫌な予感がする。

彼女はいかにも、

「不機嫌です」

というオーラ出しているような感じが……。

俺は本能的に逃げた方がいいと思い、直ぐに立った。

「友達か？んじゃ俺は行くな」

と言い逃げようとした。

しかし、

「待ちなさい」

と、不機嫌そうな彼女が言った。

彼女は階段から落ちた人を見て、そして俺の方に来た。

パシーン

「痛て！」

俺は彼女にビンタをされバランスを崩してしまい、頭を壁にぶつけた。

あつ、何か意識が……。  
俺は倒れた。

「最低！」

という女の声が聞こえた瞬間、俺は意識がなくなった。

3人の謎の女（後書き）

感想をお願いします。

**宣戦布告！（前書き）**

すみません！

やっとヒロイン登場です！

**宣戦布告！**

ここはどこだ？

なんか、嫌な場所だ。

俺は暗く何も無い所にいた。

「最低」

ピンタした女の人の声でした。

俺は回りを見たがない。

「最低」 「最低」 「最低」 「最低」

と繰り返し聞こえる声。

「あれは、事故だあー！」

俺はぱつと起きた。

・・・ん？

ここは？

俺はベッドの上で寝てたようだ。

そうか。俺気絶してたのか。

つまり、ここは保健室？

とりあえず、俺はベッドから降りて先生が居るかを確認してみろ。  
いないようだ。

先生がいなければ保健室を出ようかなと思った時だ。

「お。気づいたようだな」

扉から男が入ってきた。

スーツを少しだらしく着て、髪は少し長めだった。

確か、この人は・・・誰だっけ？

思い出せない。

「俺とは初めて会うな。本城智也ほんじょうともし。今日からお前の担任だ。よろしくな」

と言った。

そうだ。一年前に赴任した人だ。

S組の担任だ。

まだ新人だが、高学歴で人気ナンバー1の先生だ。

ただ、性格は自由すぎるため教頭に結構叱られている。

「あ。よろしく願いします」

俺はお辞儀をしながら言った。

だが、先生は笑い、

「俺堅苦しいの苦手だから、そういうのいいよ」

と答えた。

一応あなた先生なんですけど……。

「本城って言うてくれ。俺はそんな先生って呼ばれるほどできていない」

と先生は言った。

いいのか？

「はー。分かりました」

と俺は言うのと、本城さんはにこりと笑った。

「うん。クラスはわかるよな？んじゃ、クラスに戻ってってくれ。俺はここで寝るから」



と言いベッドに向った。

えっ？

寝るの？

俺の様子見るために来たんじゃないの？

「せつ……。本城さん授業は？」

「ん？あゝ。自習にしといた」

と本城さんはこっちを見て言った。  
いや、自習って。

「平気なんですか？」

俺は恐る恐る聞いてみた。

しかし、本城さんは笑いながら、

「平気も何も、俺眠いんだもん。だから寝る」

と言った。

ここまで、自由すぎるとは……。

俺はこの人の自由さに驚いた。

~~~~~

「着いたな」

俺は本城さんと別れた後、自分のクラスに向かった。

いよいよ始まる。

俺は扉を開け、中に入った。

クラスの連中は俺が入ってきた事に気づかず、いまだに話している。俺はそのまま進み、教卓の所に行く。

みんな俺に気づいたのか、話声がなくなりクラスの中は静かになった。

「俺今日からS組に入る織田 圭介。俺の席どこ？」

いまだにS組に入るのは間違いであってほしいと思ってる。だが、逃げたら負けだ。どうなるか分からないが一応やってみよう。

俺の………S組ライフ!!

「待ってましたよ。織田君」

と言いながら前から桐島が出てきた。

「お前今までどこにいたんだ？」

「それはこちらのセリフです。まー積もる話は置いて、席に座りましょう」

と言い、俺の席を案内してくれた。

「さてと、まずは何から話しましょうか」

と桐島は微笑みながら言った。

確かにいろいろ聞きたいことはあるが一番聞きたいのは……。

「何でも答えられるか？」

俺は真面目な顔をして聞いてみた。
桐島はにっこりと笑いながら、

「答えられる範囲なら答えます」

と聞いた。

なら、言ったほうがいいな。

俺は一息入れて、

「何で俺はこのクラスに入ることになったんだ？」

と聞いてみた。

そう。

究極の問題だ。

今までの生活を振り返ってみると、自分で言うのもなんなんだが不真面目なほうだ。

S組は成金クラスだが、腐っても成績優秀な人達しか入れない。俺は成績はそんなに良くはない。

桐島は少し残念そうな顔した。

「その事ですね。それはあなたの3学期のテストです」

と桐島は言った。

はて、3学期のテストで俺は何したか？

桐島は少し苦笑いをした。

「その様子だと忘れてるようですね。あなたはそのテストで満点を
とりましたね」

・・・おー。

そういえばそうだ。

あれは自分でも驚いたー。

でも、それだけじゃS組にはなれないだろう。

「だけど、S組は1年間の成績優秀者の中の上位者10人だろ？そ
れに、金持ちじゃないと無理だし」

と俺は桐島に言った

桐島は微笑みながら、

「思い出したようですね。はい、そうです。それが普通なんです
が、あなたは普通では無いんです」

と桐島は言う。

ん？

普通じゃない？

「おい、普通じゃないってどういう意味だ？」

「織田君。君はこの学園にいる『大権力者』を知っていますか？」

は？

なんだそれ？

「それと何が関係あるんだよ」

俺は桐島を睨み付けながらいう。

桐島の話は先が見えない。

さっさと話をしてほしい俺にとっては、桐島の話は少し苛ついでくる。

だが、桐島は

「これはとても重要です」

ときっぱり言った。

「説明します。『大権力者』とは、この学園の理事長から与えられる物で、これを手に入れると学園を簡単に動かせる程の権力を持つ事ができます。ただし、その代わり莫大なお金を寄付しなければいけません」

へー。

すげーな。

そんなのあったんだ。

俺は少し驚いていたのにも関わらず、桐島は話しを続けた。

「そして、それを持っている人は3人います。1人は向井ひまわり（むかい ひまわり）さん。向井さんはこの学園の理事長のご令嬢です。そして、もう一人は黒野くろの董すみれさん。黒野さんは貿易会社社長の令嬢です」

ほー。

全員金持ちなんだ。

「そして、最後に華宝院かほういん朱音あかねさん。華宝院さんは、華宝院グループ社長のご令嬢でこの人が今回の元凶です」

へー。

でも、俺その人知らないんだけど。

「待った。俺その人の事知らないし、ましてや恨まれるような記憶が無いぞ」

俺がそう言つと、桐島は笑つた。

「確かに。あなたは彼女に直接的には恨まれるような事はしてません。ここで、さっきの話に戻ります。あなたが期末で取つた順位。ここに問題があります」

は？

順位？

「あなたはすべての科目を満点を取りました。今回あなたのような方はいませんでした。つまり、必然的に順位は1位ですよね？」

だからどうした。

「華宝院さんは今まで1位だったのに見ず知らずの方に1位の座を取られ、復讐するためにS組に入れたのです。つまり、あなたは例外なんですよ。11人目のS組さんです」

と桐島は言った。

俺は考えた。

……結果、俺は……。

「・・・逆恨みで入ったって事？」

「はい。そうなんですよ」

桐島はさらりと答えた。

え？

そんだけ・・・。

「ふざけんなああ!!」

とりあえずぶちギレました。

「1位とれなかっただけで、S組に入れさせるなあ！」

「はい。そういう方なんですよ」

桐島は微笑みながら言った。

「でも、S組に入ってもいいじゃないありませんか。きっと楽しい生活

になりますよ」

桐島はそう言いながら、手を俺の前に出した。

「……なんだ。その手は？」

「握手ですよ。これからクラスメートなんですから」

俺はその手を見ながら、

「……俺は今まで通りの普通の学費でいいのか？」

「多分払ってくれるでしょう」

「なら安心だ」

莫大なお金を払わなくていいなら、ここから出て行く理由なんて無い。

そして、復讐するならしてみる。返り討ちにしてやる。

俺は心の中で笑いながら、桐島と握手した。

しばらくして、桐島から手を離れた。

「ところで、織田君知ってますか？華宝院さん達は、『花の三女』と周りが呼んでいるのです」

と桐島は言った。

何それ？

「何その『花の三女』って？」

「彼女達は自分の名前に花の名前がありますよね？だから、そう呼んでるんです」

あゝ。

確かに、薫、ひまわりだもんな。
ん？でも、華宝院だっけ？あいつには無いぞ。

「おい。華宝院には花の名前が無いじゃねーか」

「それはですね。彼女の名前とイメージから・・・」

と言った時教室から誰かが入ってきた。

「疲れた〜。全く、何で私がこんなことしなきゃいけないのよ。さ
さっとお茶にするわよ」

「……一応授業中……」

「いいんじゃない？自習なんだし。バレなきゃ平気よ」

つとビンタした女、階段から落ちてきた女、人の話を最後まで聞か
ない女の順で教室から入ってきた。

「あっ！あいつら！」

俺は立ち上がり、彼女達の方に行った。

「おい！」

俺はビンタした女の目の前に立った。

「あら。もう目覚めたのね。一生目を開けなければよかったのに」

と、ビンタした女は一言言って何事もなかったように席に座った。

「それはどういう意味だ？」

俺は少しキレていた。

だが、彼女は聞いていないのかティーセットを出し始めた。

「てめえ！」

俺はもう我慢できなかった。

その時、

「まあまあ落ち着いて。君S組だったんだ」

と、いきなり人の話を最後まで聞かない女が俺の前にでてきた。

「あたしは、向井ひまわりだよ！君は？」

と明るく言った。

俺は彼女の行動に戸惑いながら、

「俺は織田圭介です」

「あつ！君が織田君なんだ。これからよろしくねっ！」

向井さんはにつこりと笑った。

ヤバい。めっちゃ可愛い……。

俺はしばらく彼女の笑顔に見とれていた。

だが、誰かが後ろから俺の裾を引っ張ってる事に気づき、振り返って見ると階段から落ちてきた女がジーと見ていた。

「……私……黒野董……よろしく」

と言ってお辞儀をした。

つまり、この人達が大権力を持つ人達か……。

そして、名前に花の名前。

「向日葵に董か……」

と呟いていた。

ピンタした女はいきなり俺を睨んだ。

「あなた、馴れ馴れしいんだけど。一体何様？」

と彼女は言った。

別にそういつつもりで言った訳ではない。

「俺はただ花の名前を言ったただけだ。それに、さっきから何なんだ。お前こそ何様だ」

俺は彼女を睨み返した。

「織田くん。彼女が華宝院さんですよ」

後ろから桐島は微笑みながらやって来た。

ほー。こいつか。

俺は鼻で笑いながら。

「テストで満点取れなくて悔しい華宝院さん。その態度治してくれない？」

と言った。

だが、華宝院は全く気にせず、お茶を飲みながら

「変態の話なんて聞く価値もないわね」

と言った。

変態！？

あの事か？

「あれは事故だ！！勝手に変態というあだ名をつけるな！」

「あの時鼻伸ばしてたのは誰かしら？やましい事考えてるからそうなるんでしょう？もう喋らないでくれない？目障りだし。さっさと私の前から消えて。変態さん」

と言い俺を睨んだ。

この女ウザイ！

「まあまあ落ち着いて下さい。織田君。彼女の口の悪さは昔からですから」

と俺を宥める桐島。

「これで分かりましたか？彼女の花は？」

と桐島は言った。

全く分からない。

つか、そんな事どうでもいい。

「彼女は薔薇がピッタリ合っているんですよ。薔薇には棘がありませんよね？だからなんです」

と言った。

薔薇？

どこがだー！！

薔薇に失礼だろ！

「あいつは薔薇なんかじゃねえー。荊だー！！荊だー！！」

「そうですか。なかなか面白い事いいますね」

と桐島は笑った。

「痛い薔薇と書いて痛薔薇なんてどうですか？」

とか、言い始めた。

そんな事俺にとってどうでもいいわー！！

「彼女は、かなり美しい部類に入りますが、口から毒を吐く。美し

い花には棘があるとは正にこの事。ピッタリです!」

とか言い始めた桐島。

誰か桐島の暴走を止めてくれ。

正直うるさい!

「あんた達。うるさいわよ!授業中なんだから静かにできないの?」

とか言う華宝院。

確かに授業中にうるさいのは不味いが、堂々とお茶飲んでるお前に言われたくない!

「ハイハイ。落ち着いて。あっ!織田君も紅茶飲む?美味しいよ!」

と華宝院を宥める向井。良い人だ。

と少し感動する俺。

「何でこんなやつにお茶あげなきゃいけないのよ。こいつはトコト
ン苦しめるんだから」

と言う華宝院。

だが、最後のは何だ?

「おい。苦しめるって何だ？」

「そうね。説明してあげるわ」

と華宝院は席から立ち上がった。

「このS組では私が一番トツなの。私は先生やクラスメート、ありとあらゆる人を動かせるの。これがどういう意味か分かるわよね？あなだが学校に来たくなるほどの地獄を見せてあげるわ」

と華宝院はクスリと冷たく笑った。

・・・なるほど。

普通の人ならビビるだろう。
だが、

「・・・賭しない？」

「は？」

突然言った俺の言葉に驚く華宝院。

「俺が、この学校を一回でも休んだら俺の負け。お前のいいなりになる。だが、俺が一年間学校を一回も休まなかったら俺の勝ちって、いうのはどうだ？」

華宝院達は俺の言葉に驚いてた。

「・・・正気なの？」

「あゝ。正気だよ。もしお前が負けたら一生の恥をかく。だって、お前は色々な手段を使ってもいいのに、勝っていないなんて可笑しいだろ？」

華宝院は絶対にプライドが高い。
リスクはこれが一番妥当だろう。

「面白いですね。やってみましょう」

と桐島は俺たちの真ん中にやってきた。

「ちよっと！勝手に決めないで！」

華宝院はそう言いながら桐島を睨んだ。
だが、桐島はそんな事は気にせず華宝院の方を向き。

「華宝院さん。あなた、彼に復讐したいのですよね？だったらチャンスじゃありませんか？」

「でも……」

華宝院は弱気になっているが、桐島はそんな事気にせず話を続けた。

「これを受けなければ、あなたは逃げた事になりますよ？それでも良いんですか？」

「……分かったわよ」

華宝院は諦めたらしく俺の方を向いた。

「覚悟しなさい。きっと後悔するわ」

俺は笑いながら。

「残念。俺は勝負になると諦めが悪いんで。そっちこそ半端な覚悟

だとかてねーぜ」

と華宝院に指を指しながら言った。

これから始まるS組生活。

どうなるか分からないが、一つ言えることは退屈しない生活になる
ということだ。

宣戦布告！（後書き）

感想などお願いします！

S組初授業！

ここ桜花学園にはS組という物がある。

成績優秀で尚且つ、お金持ちの10人しか入れないクラスである。だから、皆さんリムジンやベンツで送ってもらっちゃつが多い。

今日も皆様車なんで、正門は車ばかり。

だが、S組に1人だけ例外がいる。

そう。それは……。

「邪魔だー！」

俺は車と車の間を上手くすり抜けて、S組の校舎へ向かう。

俺こと織田圭介は今日もチャリで爆走中。

車よりも早く走ってますよ。

だから、前に何かいたら一応避けるが、声で危険を教えてください。

「ハアハア。後もうちよい！」

S組の校舎に繋がる、3キロぐらいある急な坂である地獄坂（勝手に命名）を勢いよく登る。

今の俺には、風しか感じられない。

「ゴール！」

俺は登り終わりました！

一度もチャリから降りずに登りきりましたあ！

「ハアハア。疲れたー」

俺はチャリから降りて適当な所にチャリを置き、校舎に入ると直ぐに桐島に出会った。

「おはようございます。どうしてそんなに疲れてるんですか？」

「いや、チャリで登校したからな。やっぱり最後の坂はキツイな」

と俺は苦笑いしながら、坂を指を指す。

桐島は驚いた顔をしている。

「織田君。君は自転車でこの坂を登ったんですか？」

「おう。そうだぞ。しかも、チャリから一度も降りてないからな。凄いだろ」

俺は少し自慢した。

だが、桐島はハアとため息をついた。

「織田君。この坂を登らなくてもいいんですよ」

と桐島は指を指した。

その方向をみると、何やらエレベーターらしきものが……。

「そんな……」

俺はそう呟いた瞬間倒れた。

~~~~~

「え〜今日から授業を始める」

1時間目の数学の先生はそう言って黒板の方を向き授業を始めた。

だが、俺はさっきのショックで未だに立ち直れなかった。

「そんなにショックだったんですか？」

俺の隣である桐島は苦笑しながら言った。

「あー。結構頑張ったのにな。ハア」

俺は机に頭をつきながら桐島と会話していた。  
今の俺のテンションじゃあ授業は無理だ。  
俺の頑張りを誰か返せ。

「おい！そこ。何やってんだ！」

先生は俺達を授業を受けてない事に気づいたらしく怒鳴ってきた。

「織田！貴様初日からいい覚悟だな。友達とお喋りとは良い身分だなあ」

先生は俺を少し見下したような感じで俺を見ている。

すみませーん。最初に桐島君が僕に喋りかけたんですよ。  
だから僕コレ悪くないですよ。

だが、俺の声は先生の耳には聞こえず（聞こえたら聞こえたで問題になるかもな）先生は話を続ける。

「織田。貴様余裕だな。なら！この問題をやってみろ！」

先生はそう言って、いつの間にか問題が書かれている黒板を叩いた。

ハア、何で俺が……。

俺は立ち上がり黒板に向かう。

そして、黒板の問題と5秒ぐらい、にらめっこしてチョークを持ち書き始めた。

5分ぐらいたってからやっと問題を終えた。

「ふー。終わった。先生。これでいいんですね？」

俺は先生を見た。

先生は少し驚いた様子で俺の解答を眺めた。

「……正解だ」

先生はポツリと呟いた。

俺は先生に微笑みながら。

「先生。今度俺に問題出すときはもっと難しいやつをお願いしますね」

と言って俺は自分の席に向かった。

俺は自分の席に戻る時、桐島は音が出ない軽い拍手をした。

「凄いですね。この問題、僕には解けませんでしたよ」

と笑いながら言った。

俺は桐島の言葉に、

「フツ」っと笑いながら、自分の席に座った。

「あれぐらいの問題なら俺には余裕だね」

俺は桐島の方を向き、小さな声で言った。

「あれは多分T大レベルの問題ですよ」

と桐島は言った。

あれがT大レベルだと？

「T大も落ちたもんだな」

と俺はため息をつきながら黒板を見た。

「そんな言葉いえるのは織田君ぐらいですよ」

と桐島は苦笑しながら言った。

そして、桐島はある場所に指を指した。

俺はその方向を見てみると華宝院が悔しそうにしていた。

「多分、華宝院さんがこの問題を織田君に出すようにしてたらしいですね」

と桐島は華宝院の方を向きながら言った。

なるほど、もう来たか。

だが、どうやら失敗だったな。

俺は華宝院の方を眺めていた。

華宝院は俺らが見ているのが分かったのか俺らの方を見た。

俺は鼻で笑いながら華宝院を見た。

華宝院はそれを見た瞬間、凄く悔しそうにしていた。

ハハハ。

ざまーみやがれ。

俺は心の中で笑いながら、黒板の方を向いて授業を受けた。

~~~~~

無事1限は終わり2限目である。

「次は体育か・・・」

俺らは体育のため、ジャージに着替えてグラウンドに出ている。

桐島達はS組専用のジャージで、俺は今まで使ってたジャージである。

もちろんS組専用のジャージは高い。

「えー今日は50メートル走をやる。いいか！各自準備運動やるよ
うにー！」

とゴリラみたいな体育の先生は大きな声で言った。

「はあ。だりー」

俺は重い体を動かしながら、準備運動中。

「織田君は体育は好きですか？」

と隣で桐島も準備運動をしている。

「うーん。あまり、好きではないな。桐島は？」

俺は桐島の方を向き、ストレッチをする。

桐島は苦笑をしながら、

「そうですね。僕もそんなに好きではありません。運動神経があまりよくないもので・・・」

と言った。

なるほど。確かに桐島は背は高いが、体はスラリとした体格である。体育会系の人間ではなく、むしろ文化系の人間だ。

「そうか。さて、準備運動も終わったし少しアップするか」

と俺は言い、少し走り始めた。

その後、先生が全員を呼び、クラウチングスタートや、早く走るた

めのコツを軽く説明し、いよいよ走る事になった。

そして、俺の走る番である。

「位置について。よい・・どんー!」

俺は一応、一生懸命走る。

そして、タイムは・・・。

「織田、7秒02だ」

先生が俺のタイムを言ってくれた。

ふむふむ。

まあまあ良いタイムである。

「織田君どうでした?」

後ろから桐島が聞いてきた。

俺は少し笑いながら、

「7秒02だ。まあまあいいかな」

と言った。

桐島は苦笑しながら、

「良いですね。僕なんか8秒50ですよ」

と言った時、先生の驚きの声が突然聞こえた。

「6秒02！やはり、速水は凄いなあ！」

と先生は感心している。

その横に短髪で背は180ぐらいある男がいる。

「彼は速水^{はやみ}健^{けん}です。スポーツ会社社長の息子で運動神経抜群の人です」

桐島は俺が速水の方を見ていたのに気づいたのか、説明してくれた。

「ふーん。まっ俺には関係無いし」

桐島の方を向きそう言って、日陰がある場所で涼もうと思いい、日陰を探そうとした。

だが、

「ちょっと待って！織田君！」

突然名前を呼ばれたので、俺は振り返ってみると速水がいた。

「織田君。勝負しない？」

と速水が言った。

は？

何でお前と勝負しなきゃいけないの？

俺は嫌そうな顔した。

「なんでお前と勝負なんか・・・」

俺はそう言って勝負を断ろうとした。
だが、

「逃げるの？」

速水は俺に言っではいけない言葉No.1を言った。

ブチっと俺の何かが切れた。

「オイ。今、なんて言った？」

俺は速水を睨みつけながら速水の所に行く。

「ん？ただ、勝負に逃げるのって言ったただだよ」

と速水は涼しげに言う。

ほほーう。

言うじゃないか。

「賭・・・しよっか」

いきなり、速水はそんな事いい始める。

「ちよっと君の真似をしたんだよ。織田君、賭好きでしょ？」

明らかに俺を挑発している。

・・・言うね。

俺はもう、我慢できなかつた。

しかし、いきなり桐島は俺の肩を掴んだ。

「何だよ！」

俺は桐島に怒鳴った。

だが、桐島は落ち着いた様子で俺に言った。

「この勝負は明らかに華宝院さんが仕掛けたものです。彼はこんな事をする人ではありません」

俺はその言葉を聞き、華宝院を捜してみると、確かに華宝院の顔は少し笑っていた。

・・・なるほど。俺は桐島の手を持ち、下に下ろした。

「桐島。例え、華宝院だろうが速水だろうが関係ない」

俺は速水の方に行った。

「その勝負、受けてやるうじゃねーか。覚悟しろよ」

桐島は俺を止める事を諦めたらしくため息をつき、速水は少し笑った。

「うん。じゃあ賭は勝った人の言う事を聞くことでいいかな？」

と俺に聞いた。

多分あいつが勝ったら華宝院がらみになるだろう。だが、実際そんな事どうでもいい。

「上等だ」

「じゃあルールはこの400メートルグラウンド一周で速く走った方が勝ちね」

と速水は自分の得意分野で勝負しようとする気らしい。

「何でもいい。さっさと始めるぞ」

俺がそう言うと速水は早速先生を説得しクラスメートを説得し、準備をした。

そして、いよいよ勝負する事に。

「何で、勝負を受けたの？」

スタート地点に行くとき速水は突然そんな事言った。

「自分で言うのも何なんだけど、僕の得意分野だよ」

俺は速水を見て、

「別に。どんな勝負だろうと、受けたからには絶対に勝つ！」

と言うと、速水も微笑んだ。

「じゃあ！位置に着いて！」

俺らは先生のかげ声で、クラウチングスタートに構える。

「よいい！・・・どん！」

先生のかげ声が言った瞬間、俺らは同時に走った。

だが、速水の方が速く、俺との差は約1メートル。

なんとか、必死で差を無くそうとするが、なかなか埋まらない。

今は現状維持が精一杯だ。

本当に精一杯？

俺の頭の中でこの言葉がよぎった。

これで一生懸命なのか？

本当に？

色々と頭の中で疑問が浮かんでくる。

そして、残り100メートルぐらいで、

このままだと負ける

と頭の中から出てきた。

それだけは・・・

それだけは・・・

俺は菌を食いしばり、前をしっかりと見て、

絶対にさせない！

と心の中で叫びながら、ひたすら走った。

すると、何故だか速水との差がドンドン縮まってきた。

速水は走りながら後ろを見て驚き、慌てて走った。

逃がすかあ！

俺は速水に追いつこうと力の限り走る。

差もドンドン縮まってくる。

そして、少し速水が前だが、俺らは横にならんだ。

速水も余裕が無くなっているのか真剣な顔つきになっているのが見えた。

あと、もうちょい！

だが、ゴールは後10メートル。

間に合うか？

後5メートル。

俺は最後まで諦めず走ってるが、今だに速水が前だ。

ここまでか？

そう思ったが、速水はゴール一步手前で体制が崩れた。
どうやらコケたらしい。

だが、俺はそんな事気にしないで走る。

そして……………。

「ハアハア」

俺は走り終えてかなり疲れていた。

「織田の勝ちだ……………」

先生は驚いた顔で手を膝につき、顔は下の方を向いてる俺を見た。

「うおおお！」

クラス中（S組だけ）から驚きの声がする。

そうか、俺勝ったんだ……………。

「よっしゃー！」

顔は上を向き両手でガッツポーズで叫んだ。

「いきなり叫ばないで下さい」

俺は前を見ると、耳を押さえて苦笑している桐島がいた。いつの間に……。

「お前いつからいた？」

「君が大きな声を出す前です」

桐島やれやれといった感じで言った。

そうか……全然気づかなかつたよ……。

「やられちゃった。やっぱり凄いな」

と笑いながら速水がやってきた。

「別に凄くねーよ。それに、お前がコケてなかったら多分負けてた」

「でも、負けは負けだよ」

と速水は言った。

そして、真剣な顔つきで俺を見た。

「次は負けない」

そう言っただ笑った。

俺も笑いながら、

「おう。いつでも来い」

と言い俺らは笑った。

「本当にあなたは面白い方です。そういえば賭けありましたよね？
あれはどうするんですか？」

桐島は笑いながら言った瞬間、速水は凍った。
そういえば、そんな事あったな。

「あまり無茶な要求は無理だよ」

速水は苦笑いしながら答えた。

オイオイ。何でも言う事聞くんじゃないのか？

まっ俺は最初からお願いしたかった物があるから、これにするつもりだったからいいけど。

俺は速水の方を向いた。

さっきの穏やかなムードとは違って緊迫した雰囲気となっている。

そして、俺は速水に真剣な顔つきで、

「お前らの着ているジャージを俺にもくれ」

と要求した。

2人とも俺が言った事に固まった。

え？

何でそれだけで固まってんの？

「そんなのでいいの？」

速水は恐る恐る言った。

俺の要求がそんなのって……。

「今の言葉に少し傷ついたが、まあいいや。俺金無いからさ今のジヤージでやってんだが、1人だけ違うジヤージって嫌じゃん。だから頼む」

俺は苦笑いしながらそう言うと、速水はにっこりと笑いながら、

「うん！喜んで！」

と快く引き受けてくれた。

~~~~~

悔しい！

何で負けんのよ！

本当に使えないわね！

私は今猛烈に怒っていた。

「織田君が凄いからだよ」

後ろから、ヒマワリが言った。

「あんなのマグレよ！」

私はヒマワリに向かって怒鳴った。

そうよ。マグレよ。

速水がコケてなかったら負けてたわ。

そうに決まってる！

「……でも……負けは負け」

とヒマワリの横から小さな声でスマレが言った。  
ぐっ。

それはそうだけど……。

私は2人を睨みつけ大きな声で怒鳴りつけた。

「うるさい！うるさい！私はあるやつに負けたくないの！」

「でも、勝てる要素が無くない？」

私はヒマワリの言葉にグサツときた。

「だって、最初の数学の問題ってアカネが作ったものでしょ？でも、簡単に答えられちゃたし、オマケにクラス1位の運動神経抜群の速水君に勝って、無敵じゃん」

そう。最初の1限の問題は私が寝る間も惜しんで作った問題で、それをたった5分で……。

「……アカネ……負けっぱなし……」

スマレの言葉で、私はかなりのショックを受けた。

「……」

「ちょっと！スマレ！言い過ぎよ。アカネかなりショック受けてる！」



「・・・ごめん」

2人は少し慌てた様子で私を見た。  
だけど、

「・・・・・・・・クツクツクツ」

「アカネ？」

いいわ。

上等じゃない。

あの手でいくしかないわね。

私は急いでケータイを出して、電話をした。

「もしもし！私よ！明日までに作戦Kを実行する準備をしなさい！」

私は大きな声で電話をしていた。

「あゝあ。アカネ暴走しちゃった。アカネは昔から暴走すると、なかなか止められないんだよね」

「・・・・・・・・アカネ・・・・・・・・大丈夫かな・・・・・・・・少し・・・・・・・・怖い・・・・・・・・」

少し外野が騒がしいけど私は全然気にせず電話をしていた。

「えー。そう。それから……。そうそう。早くしてよ。じゃあ

ピッ！

と電話を切り、

「ここからが本当の地獄よ……」

と言って笑った。

S組初授業！（後書き）

昨日気付いたのですが、総アクセス数PV8000以上、ユニーク数3000以上이었습니다！ありがとうございます！（T T）  
これからもよろしくお願ひしますm（）（）m

出でよ！地獄の番犬！？

昨日も少しやりすぎたかな？

今日も俺はチャリをこぎながら、昨日の事を反省していた。

だが、もしあの時勝負を受けないという選択肢は無かったしな。でも、昨日は目立ってたのは、1限と2限だけだったし・・・。

そう、昨日は2限体育からは普通の授業だった。

まー強いて言うなら、やはり一般授業とは全然違う。

今まで受けた授業で、一番良かった。

先生の説明の仕方がとても分かりやすく、自然と授業を受ける気になった。

まー、それはさておき、昨日はそんな感じで平和に過ごしてた。

もう、ネタが尽きたのか？

いや、それは無いよな。

なぜなら、あいつは結構負けず嫌いというか、しつこそうな人間だしな。

と俺は華宝院の事を考えながら、チャリをこぐ。

おっ！

学校が見えてきた！

俺は学校が見えた瞬間、チャリをこぐペースを上げた。相変わらず、学校の前にはお高そうな車の数々が止まっている。

たまには君らもチャリで来なさい！

という事を心の中で、思いながら学校の中に入る。

「ふー。確かここら辺だったような……。お！あつた、あつた！」

俺は昨日桐島から教えてもらったS組の校舎に繋がるエレベーターの入り口を見つけた。

とりあえず適当にチャリを置き、入り口の扉を開ける。すると、前に速水がいた。

「あつ！おはよう！」

速水は俺が入ってきた事に気づいたらしく、わざわざ俺の所まで戻ってきた。

あれから、俺は速水と打ち解けた。

案外喋ってみると、とってもいいやつだった。

「おう。おはよう。お前いつも、この時間に学校に来てるのか？」

「うっん。今日は朝練がないから」

と速水は言った。

そういえば、速水は陸上部に所属しているというような事を聞いたな。

「あ！そつだ。はい。これ！」

と速水は何やら紙袋を俺に渡した。

ん？何だコレは？

俺は中を見ると服、いや正確にはジャージらしき物だ。

「昨日の賭けで、織田くんが要求したものだよ！」

速水は笑顔で言った。

速水・・・お前・・・。

体育のある日にコレ持ってこいよ。

今日体育ないから荷物になるじゃねーか。

と我ながらヒドイ事を思ったが、そんな事を言わず、

「サンキューー。助かった」

と素直に喜んだ感じで、俺は答えた。

「正直体育の時に渡した方がいいかなって思ったけど、早い方がいいかなって……」

速水は苦笑しながら言う。

速水さん。できれば俺はそっちの方がよかったです。

~~~~~

そんな感じで、俺らは教室へと向かう。

「今日は、どんな事するの?」

と速水は突然変な事を言う。

どんな事するの? って言われてもな〜。

俺は、いつも……。

とS組来てからの日々を振り返ってみると、いつも普通の生活であ

ると続く言葉が、素直に言えなかった。

確かに、初日にS組のボス（華宝院）にケンカ売るとか、クラスで一番足が速い速水と勝負して勝つとか、この生活は決して平凡とは言えない。

俺はため息をつくとき、速水は笑いながら、

「何かと問題を起こしてるもんね」

と速水の言葉にすぐ反応した。

「冗談じゃない！俺が問題を起こしてる訳ではなく、おまえらが起こしてるんだ！謂わば、俺は被害者だ！」

と俺は睨みながら、速水に言った。

「まーそうだけど・・・」

と速水は苦笑いしながら言う。
そう。

もともと、俺は被害者なんだよ。

俺はそう思いながら教室の扉を開けると前に、真剣な顔をした桐島

がいた。

何だ？

こいつが真剣な顔するなんて……。

俺は少し驚きながら桐島を見て、

「どうした？何があった？」

と言つと桐島は指を指した。

「……あれを……」

俺は桐島が指を指した方向を見ると、俺のロッカーが微妙に動いている。

ん？

動いている？

「……何で？」

普通動くはずがないロッカーが、一人でに動いている。

「駄目じゃないですか!」

と桐島は突然怒りだす。

うお！？

何だいきなり。

「あなたがそんな方だったなんて……。最低です！」

とか、言いだす桐島。

いきなり何を言いだすんだ……。

「おい。何を言ってるんだ？」

「とぼけないで下さい！あなたは人の道を外そうとしているのですよ！」

と桐島は言う。

何でそこまで言われる必要がある。

だが、桐島は止まらず喋る。実際、俺達では桐島の暴走は止められない。

「ハア」。これは大変です……。」

と桐島はため息をつきながら言う。
そして、

「あの中に人を閉じ込めさせるなんて……。最低です！」

と爆弾発言を放ちやがった。

桐島の発言により、俺はフリーズ状態になった。

だが、桐島は俺の今の状態に気付かないで、自分の妄想ワールドを続ける。

「あの中には多分女の人が入れられており、無理やり閉じ込めさせ、あーんな事やこーんな事をしたりするんでしょう」

と言う。

俺はやっとのことでフリーズ状態から抜け出し、周りを見てみるとS組の皆さんは白い目で俺の事を見ていた。

しかも、速水まで白い目で俺の事を見ている……。

「……桐島」

俺は桐島の肩にポンっと手を置くと、桐島は俺の顔を見た。

「・・・変な妄想すんじゃないやねえええ！」

と俺は叫びながら、桐島を殴りました。

~~~~~

俺は桐島を黙らせた後、皆さんに誤解を解き、今に至るのだが。

「さて、コレをどうするか・・・」

俺は動くロッカーを見つめる。

コレは開けた方がいいのか。いや、待てよ。このまま、あえてスルーした方がいいかもしれない。

「早く開けないと授業始まるよ」

と速水は急かす。

確かに、後5分でホームルームが始まる。だったら、なおさらスルーだ。

「いや、スルーしよう。変な物が入ってたら、逆に面倒だ」

「でも、本城さんが強制的に開けさせると思っよ」

そっだ。

あの自由人は……。

「それはあり得ないだろ」

あの自由人は自己中だし、そして何より面倒なことは嫌いな人間でもある。

「でも、面白いことになりそうな物なら、トコトンやる人だよ」

……確かにそっだ。

あの自由人ならやりかねない。

「あゝくそっ！開けりゃあいいんだろっ！開けりゃあ！」

俺はやケクソになりながら、ロッカーに行く。

ガタガタ動くロッカーの開け口に手を触れ、恐る恐る開けてみる。

「ガールルルル。」

ボタン！

俺はロッカーの中から発した音が聞こえた瞬間、急いでロッカーを閉めた。

ガールルル？

え？何今の？

「織田くん……。今何か……」

「速水！気のせいだ！何も聞こえてない！そうだ！空耳だ！もう、ロッカーに近寄らないで、そのままスルーだ！」

俺は速水の手を遮りながら、危険地帯ロッカーから急いで離れた。

だが、

ピイイイイイ！

と大きな音が聞こえた瞬間、危険地帯ロッカーから何かが飛び出てきた。

俺は後ろを振り返ってみると、鋭い牙を持ち、ハアハアと涎を垂らす魔物（犬）が俺ら（クラスメート）の事を睨んでいる。

俺らはその魔物を見る。  
その魔物（犬）は俺の方を向くと、目を光らせて（俺にはそう見え  
た）、俺をロックオン。  
魔物（犬）は走る体制をとり、獲物（俺）の所にめがけて走ってき  
た。

ふざけんな！

俺はとりあえず、急いで教室から出ようとした。

扉に向かうと、本城さんが入ってきた。

「ハアゝ怠いな。おい。おまえら席に……」

「どけ！」

俺は怒鳴りながら本城さんを跳ね飛ばし、速攻で階段まで行くこと  
する。

後ろを振り返ってみると、やはり奴は走ってくる。

「何で……こんな事になってんだああああ！」

と叫びながら逃げる俺であった。

~~~~~

「ふふふ。流石はケロボロスだわ」

私はさつきケロボロスを呼んだ金色の笛を持ちながら、笑っていた。

「もしかして、昨日電話したのってアレのため？」

ヒマワリが聞いてきた。

「そうよ。あの子は我が華宝院家で鍛えられた、最強の警備犬。ケロボロスよ」

私は説明すると、ヒマワリはため息をつく。

「これだけのために、500人のSPを使ったのね。」

「・・・アカネ・・・こんなくだらない事で・・・SP使わないで・・・」

「

とヒマワリ、スマイレは言う。

くだらない？
どこが？

「くだらなく無いわよ。誰にも見つからないためにSP使ったのよ。それに、憎き相手。変態（織田）のためなら、私は何だってするわ」

と私は言いながら笑う。

「アカネ、そのどす黒い笑い止めた方がいいよ。何か怖い。」

ふふふ。

止められないわよ。

だって、嬉しいですもん。

あの変態の焦りっぷりといったら・・・最高よ！

「イタタ。おい！アカネ！」

と私を呼び、腰を擦りながら来る我が担任、トモヤが少し苛つきながら、

「オイ。あの犬お前の仕業だよな。頼むから俺に被害が出ないようにしてくれ」

と言ってきた。
知らないわよ。そんな事。

「何で、あなたの事まで考えなければいけないのよ。あなたが、そこにいなければよかったですだけよ。それに、私が悪い訳じゃないからね。人のせいにするのも、大概にしてよね」

と言つとトモヤはキレたのか怒鳴り始めた。

「てめーがそれを言える口かあ！？前からそうだよなっ、自分の事しか考えないそういう態度！いい加減に治せ！つか……」

と私を上から下まで見た。

何ジロジロ見てんのよ！気持ち悪い！

そして、トモヤは私の顔見て鼻で笑いながら、

「お前……最近太つたな」

と言った。

私はその言葉のショックにより固まった。
だが、トモヤの反撃はまだ続く。

「そうだよな。自分が食べたいもんばっか食べてりゃあ太るよな」

何ですって！

私も我を戻し、負けじとばかりトモヤに反撃する。

「あんだこそ、そういうデリカシーの無さといい加減すぎる態度。そんなんだから、彼女に逃げられるのよ」

と言うと、トモヤは驚いていた。

「何でその話を……。つか、今それは関係ないだろ！」

「ごめんね。本当の話だったのね。詳しくは聞いては無いんだけど、1週間前の事なんだって？まだ傷が癒えてる訳ないわよね」

と私は言う。

勿論詳しく聞いていないだなんて嘘。

逃げられた日時、時間、逃げた動機等、全部私は知っているんだから。

「てめー！」

「何よ!」

という感じで、私とトモヤは言い合いになり、限丸々潰れたころには、変態とケロベロスの事なんてすっかり忘れていた。

出でよ！地獄の番犬！？（後書き）

実は先週総アクセスのPVが100000人越えました！これも皆様のおかげです。本当にありがとうございます！そして、これからもよろしくお願いします！

俺の放課後

空が茜色に染まる、6限が終わって、ホームルームに入っているなか、部活がある事に嘆く者や、この後の予定が無いいため遊びに行く者等、様々な感情が交わりながら進んでいくのだが、俺はというと

・

「・・・死ぬ」

と言いながら燃え尽きていた。

ちなみに俺は授業を真面目に受けただけで、瀕死になるような人間ではない。では、何故こんな風になっているかと言うと、これは朝のホームルームに入る前の事件により、俺は午前中ずっとあの犬に追われていた。

ノンストップで走っていたため、流石に疲れてきて、お昼ごろには
敢えなく捕まってしまう、体中が傷だらけ。

一応俺は学生であるため、そのままの状態で、その後の授業を受けるのだが、なんせ午前中走りっぱなしだったから眠い。

俺は睡魔に負けて寝ようとする、いきなり後ろから糞犬が現れ俺の頭をガブリと噛みやがる。

おかげで、強制的に授業を受けるハメに・・・。

そして何より、一番腹が立つのは華宝院が幸せそうに寝ている事だ。俺だって寝てーのに気持ち良さそうに寝てんじゃねーよ！

とまあ、そんな感じで、俺は眠さと血の流しすぎというダブル攻撃により、意識が朦朧となりながらも授業を受けていた。
んで、現在に至る。

「黄昏てますね。」

と隣の席の桐島は言う。

「・・・本当だよぉ・・・あの糞犬のせいで、死にかけだぁ・・・」

と俺は力なく答える。

「まああれだけ噛みつかていれば、そうなりますね・・・。後少しで、ホームルームも終わります。それまで頑張りましょう！」

と桐島が言う。

何！本当か！

俺は廃人一歩手前状態を解除し、本城さんを見る。

「えー明日は・・・特に無いな。んじゃ今日の掃除当番は・・・」

と本城さんは今日の掃除当番を確認している。

俺は心の中でカウントダウン。

「今日はこの列だな頑張れよ」

5

「よし！んじや今日は」

4

「号令！」

3

「起立！」

2

「命令！」

1！

「ありがとうございます」

0！

と俺は心の中で叫んだ瞬間、荷物を右手で取り速攻で教室から出る。

ピイイイイ！

とまた、あの笛の音が聞こえる。

やっぱあ！

またアイツが来る！

俺は本能で身の危機を感じ、走りながら左手でポケットの中からマイキーを取り出す。

後ろから何やら追ってくる気配がする。

振り返って見るとヤツ（糞犬）がいた。

クソッ！

お前と遊んでる暇なんかねえーんだよ！

俺は急いでエレベータの所に行き、一回押すだけでいいボタンを何回も押す。

だが、エレベータはなかなか来ない。

くそっ！

マズイこのままじゃあ・・・。

俺は急いで別の手段で今の状態を回避するために、周りを見ると何やら下に行けそうな階段があった。

俺は何も考えずに階段の所に行き、階段を降りる。

階段を降りると、朝入ってきた扉が見えた。

ビンゴ！

と心の中で叫びながら、扉の方に行き外に出て、マイ自転車の所に行き鍵を開ける。

そして自転車に跨り、後ろをみると荒い息をたてながら奴が来た。

悪いが自転車に乗った俺は誰にも止められないぜ。

と心の中で言いながら、自転車を漕ぐ、奴も追い掛けてくるが、荒い息の音がどんどん小さくなっていく。

そして、俺が校門を出たらへんで、後ろを見ると約100メートル以上の差があった。

へっ。ざまーみやがれ！

俺は心の中で言いながら（自称）時速80キロの速さで、学校を後にした。

~~~~~

さて、いきなりだがここで問題。

俺は何故こんなに急いで学校を出たのか。

大抵の方はあの犬に捕まりたくないからという答えだろう。  
だが、それだと30点ぐらいしかあげれないな。  
じゃあ答えは何かって？

その答えはというと・・・。

「着いた！」

俺は学校から約5分ぐらいしてとある場所に着いた。

そこは、俺のバイト先である『PEACH』という店だ。

実は俺には訳あって独り暮らしをしている。

そのため、朝は新聞配達をし夜はここで働いている。

ここは簡単にいうとレストランみたいな感じだが、ガトヤサゼ  
リアのようなチェーン店ではない。

俺はここで1年間ぐらいお世話になっている。

時給もいいし、ここからだとな分で家に着くんだが、正直この店  
に着くと鬱になる。

何故かというところこの店長が・・・ね。

これがまた何というか・・・。

ともかく、いい人に違いないんだがちょっと変わった人なんだよ・・・。

まーここで愚痴つても意味ないし、遅刻ギリギリなんで俺は店の裏口から入ると、身長140を満たしているかどうか分からない幼児体型の女の子がいた。

「あ！来た来た。圭介おはよう！」

と馴れ馴れしく、挨拶してくれた女の子いや、一応我が『PEACH H』の店長でもある尾崎桃子<sup>おのき ももこ</sup>さんが此方にやってくる。背があまり低いので厚底の高〜いハイヒール（特注）をはいつている姿は少し哀れみを感じる。

「おはようございます。桃子さ・イテテ！」

俺は桃子さんに挨拶しようとしたが、桃子さんは俺の所に行き右足の小指ハイヒールの踵でグリグリと思いつきり踏んでいた。

「圭介。なんか私が傷つくこと考えてたんじゃない？お姉さんそんな風に育てた覚えはないよ」

と黒い笑みを浮かべながら言った。

「すみません！凄く痛いからマジ止めて下さいー！」

と俺は彼女に謝る。

暫くして、やっと止めてくれた。

俺の小指が〜。

「まったく。酷いよ〜。昔はそんな子じゃなかったのに……」

と、よよよつと嘆く桃子さん。

「昔って1年前でしょ！1年じゃそんな変わんない！つか、あんたに育てられた覚えがないわ！」

と突っ込む俺。

もう敬語なんざ使っちゃいねー。

「さあー冗談は置いといて、ささつと働く!」

「スルーかよ!」

桃子さんはハイヒールを履いているから、靴の厚底が異様に高い（厚底が5センチ以上）靴に履きかえる。

必ず毎日1回この様に絡んでくるから最初は結構困った。

「はい！もたもたしないで、着替えて働く！」

と急かす桃子さん。

俺は急いで着替えて、タイムカードを押し働き始めた。

~~~~~

「ふ〜。疲れた。」

俺はゴミ出しを終え、地面に座り休んだ。

「流石に疲れたな〜。」

と呟きながら、夜空を眺めていた。

「そっぴゃ〜今日はゆっくりした時間が無かったな」

と今日の出来事を振り返りながらふと月を見ると、綺麗な満月だった。

「綺麗だなく。」

「それって私の事？」

といきなり桃子さん登場。俺は

「どわー!?!」

と叫びながら桃子さんを見た。

「何よその反応。お姉さんちょっと傷ついたよ。というか、どわー
って何よ」

と拗ねる桃子さん。

「桃子さんがいきなり出てきたからでしょ!つか、あなたが綺麗だ
と思わない!」

「・・・圭介そんなにシニタイノ？」

と桃子さんはニッコリ笑いながら拳を固めた。

「いや!あのですね!その綺麗とは違くてどっちかという幼稚じ
やなくて可愛い・・・」

「・・・圭介。ねんねの時間だよ」

と言いながら拳骨を食らった。

とまあ、そんなやり取りから暫くして、桃子さんと一緒に喋ってた。

「もう。圭介酷いよ〜。」

酷いのはどっちだ！

つと心の中で叫ぶが、

そんな事言ったら死亡フラグが立ってしまうから言わない。

「それはさて置きどう?」

と桃子さんは聞いてきた。

?

どう?って何が?

「何がどうなんですか?」

「そんなの学校に決まってるじゃない。学校どつなのさ」

と興味深々に聞いてくる。

別に学校はいつも通り・・・じゃない。

でも、言わなくてもいいよな。

「別に普通・・・」

「はい。嘘ね」

と俺が言い終える前に桃子さんに言われた。

「だって、最近顔ツキが変わったもん。なんかあったでしょ」

と言う桃子さん。

・・・敵わない！

俺は正直に今の学校生活を話した。

「・・・という訳なんですよ」

「なんか凄いな〜。流石大金持ちのやる事は違うわね〜」

「おっしやる通りです」

とため息つきながら答えた。

「全く。何で学校に犬もつてくんだよ！ありえねーよ」

「でも、楽しいんでしょ？」

と愚痴ってる俺に桃子さんが聞いてきた。

俺はその問に答えられなかった。

「さっき言ったけど今までの顔ツキってなんかつまらなそうにやっ
てる感じだったけど、最近は何か楽しそうな感じなんだもん。」

と桃子さんは優しい感じで俺を見た。

「圭介が楽しければ私は嬉しいよ。私は何時でも圭介の味方だよ。
その生活を大切にしなさい」

体は小さい女の子だけど、やっぱりこの人は俺より遥かに大人で、
心が凄く温かい優しい人だった。

俺はこの小さなお姉さんに素直に、

「はい。ありがとうございます」

と答えた。

そっだよな。今までの生活より凄く楽しい。

俺は小さなお姉さんに気付かせてくれた事に感謝した。

「よっしゃー！そうと決まったらあの糞犬にリベンジだ！」

と俺は立ち上がりあの糞犬の事を思い出した。

あの糞犬に噛まれっぱなしだからな、しつけしてやる！

と意気込んでいたのだが、

「そう言えば、何でこんな所で休憩してんの？」

と桃子さんが唐突に思い出した。

あ、やつばい！

俺無断休憩だった！

俺と桃子さんは見つめあい、その後笑った。

ヤバイ！この空気は……。

俺はこの空気を変えないと、デスコース決定のため急速に頭を回転しているが答えが出ない。

桃子はいつの間にか、正義の鉄槌（拳骨）を準備し、一步步つ俺の所に近づいてくる。

俺は蛇に睨まれたカエルのように動かない。

エマージエンシー！

エマージエンシー！

俺の脳内でこの状況を打破する案を考える。

桃子さんが目の前に来た瞬間に閃いた。

俺はこの案に賭ける！

っと心の中で叫び、決行した。

「・・・許ちて」

「ダ〜メ」

敢えなく失敗し、いつもより数倍の痛みの拳骨を食らった。

俺の放課後（後書き）

今月はテストやレポート等があるため更新できないかもしれませんが、
ん。ですが、なるべく更新できるように努力します。これからもよろ
しくお願いします。

く番外編：俺とアイツらの2時間半戦争く（前書き）

今回は番外編です。いつもより、かなり短いです。

〈番外編：俺とアイツらの2時間半戦争〉

6月 日

AM3:00

桜花学園1年C組である織田圭介は、ある奴と戦っている。

これは、俺にとって世界大戦や聖戦と同レベルの戦いだ。

敵の数は推定あと2機であろう。

俺はその相手になんか悪戦苦闘中である。

あー！

アイツを倒さないと明日がキツイ！

え？

誰と戦っているだつて？

んなもん決まっている。

その相手とは……。

蚊だ！

これは、俺が雑巾になってしまつぐらい働いたバイトから帰って来た時の話である。

~~~~~

AM2:30

俺は疲れた体を癒しと清潔にしてくれる風呂から上がり、美味しい水道水を飲んで、布団を敷いて寝ようと電気を消して寝そべった時である。

プーン

耳下ですべても嫌な音が鳴る。

こっこっこの音は！

アイツか！

俺は急いで起きて、電気をつける。

回りを見ると、一匹の蚊を発見！

直ちに死を！

パチーン！

俺は手で仕留める。



すると、手に残骸が残っていた。

ふ〜。

これで安らかな眠むりにつけるぜ。

と電気を消そうとしたが、

プーン

またこの音が・・・。

俺は周りを見ると・・・。

敵の数は増えて5機ぐらい見えた。

ここから、俺達の戦いが始まった。

~~~~~

AM3:30

「死ね！」

パチーン！

俺の両手が重なった時、俺の手には残骸が必ず残る神の手により、ラスト1機となった。

まー科学の力でもある、蚊取り線香という名の兵器を使っていますからね。

さて、ラスト1匹か……。

今から寝たら、1時間半しか寝れないじゃないか!!

早く仕留めなければ、睡眠時間が無くなる!

俺は慌てて敵を捜す。

暫くして最後の敵を見つけた。

……ふっ。

長かったぜ。俺は神の手を使い、敵を狙いロックオン!

そして……。

パチーン!

と神の手が重なり合った。

やれやれ。

これで終わりか。

と思ったが。

プーン

なっ何!?

俺は重なり合った神の手を開いて見ると、そこには残骸が無かった。

そっそんな……。

馬鹿なああああ!?

俺は神の手を破られたショックにより倒れた。

暫く、効果音がズーンつと鳴っているぐらい落ち込んでいたが何やら足らへんが痒くなった。

俺は取り敢えず掻いてみると、ぷくぷくと腫れていた。

こっこっこれは!

吸われた!?

・・・クツクツクツ。

なるほど。

やるじゃねーか。

K i l l Y o u ! ! (ぶち殺す!!)

俺は半分壊れながら敵を捜し始めた。

~~~~~

A M 4 : 5 5

あゝくそ!

なんで神の手が通用しない!

俺は、がむしゃらに神の手を使っていたせいか、一向に捕まらない。

落ち着くんだ。

落ち着け俺!

俺は一旦冷静になり、ターゲットを捜す。

ターゲットをロックオンし、神の手を使う。

いけ!

神の手!

俺は敵を打ち滅ぼそうとしたが、僅かに外した。

しかし、ここで終わりではない。

俺はパチーンと手を合わせた後、もう一度神の手を使う。

必殺！2連撃！神の手！！

パチーン！

俺は恐る恐る手を開いてみると、俺の手には俺の血が出て無惨な死骸・・・。

AM5:00

Mission Complete！！

俺はそのまま両手を上げながら倒れ、そのまま寝てしまった。

この後、俺は10時に起床し、朝のバイトを無断欠勤&amp;遅刻が決定となり厳しいお説教をくらいました。

く番外編：俺とアイツらの2時間半戦争く（後書き）

感想お願いしますm（）m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9053g/>

---

痛薔薇姫！！

2010年10月11日12時32分発行